

坂本小学校教育評価書

評価の基準 (A:よくできた・目標を上回る達成 B:できた・目標を達成またはおおむね達成 C:あまりできなかった・目標を達成せず D:まったくできなかった・目標を大きく達成せず)

項目	評価の観点		自己評価	取組・成果または課題	関係者評価	提言等	今後の学校改善に向けて	関連するSDGsの目標 (参考)
主体的・対話的で深い学び	1	支持的風土を育てる学級・学年集団づくりの実践	A	○学級活動を土台とした学級づくりに取り組んでいる。また、教員同士の研修会等、OJTを有効に活用し、実践の交流ができています。 ○校内研究を通して、算数科を柱とし主体的で協働的に学ぶことができる授業づくりを研究した。 ○コロナ禍により授業日数が減ったため、1時間の学びをより大切に考え、授業づくりや教材研究に注力した。	B	・IT化が進み、タブレットを活用した授業等はこれからの時代には無くてはならないが、ノート指導や読書力の指導にも取り組んでいくことが大事。 ・コミュニケーション向上のために、クラブ活動の自主運営等での自分の意見を話す、他の人の思いを聞く、受け入れるなどの活動はよい。 ・タブレット等はもちろん有効ではあるが、実際にノート書いたり辞書を引いたりすることによって、思考が整理されたり知識が増えたりする。	・県の研究指定校として、算数科を中心に「読み解く力」向上のための研究・研修を行い、子どもたちが主体的で協働的な学びができる授業を推進する。 ・子ども一人ひとりを認める場を増やすとともに、規律ある学校づくりを図る中で、居心地のよい学習集団の形成に努める。	
	2	協同する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善	B					
	3	主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修会	B					
道徳教育の充実	4	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動の実施	B	○今までに開発・整備をした資料や教材を利用して、道徳の授業を充実させることができています。 ▲保護者への授業公開の機会がもてなかった。	B	・心豊かな表現のできる人になるために、「目で聴く」「耳で聴く」「心で聴く」聞き上手な人になってもらいたい。 ・誰かの一言で全てがぼろぼろになるモラルハラスメントがあってはならない。	・道徳科の全体計画や年間計画にもとづき、行事や日々の教育活動との位置づけを明確にし指導に努める。 ・コロナ禍ではあるが、道徳科の学習の様子をできる限り保護者に伝える。	
	5	道徳科の授業・評価に関する研究や資料の開発・整備・交流	B					
	6	保護者等への道徳科の授業公開						
体力づくり	7	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善	B	○制限の多いコロナ禍の中においても、子どもたちの運動の機会の確保や体力作りに向けた取り組みを行った。 ・毎朝の簡単運動 ・ジャンプボードの増設 ・スポーツフェスティバル ・持久走(ペース走)参観 ・なわとび運動 ▲コロナ禍で体育学習や遊びの活動内容に制限がかかっているため、引き続き運動量の確保と運動技能の向上に向けた取り組みを行う必要がある。	B		・今後も感染予防に留意して、子どもたちの運動機会の確保や体力づくりに向けた取り組みに努める。	
	8	体力づくりを推進する運動実践	B					
	9	体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲の育成	B					
指導改善 (組織的・計画的)	10	学力向上を目指した指導体制・指導方法の工夫改善	A	○休校中の課題づくりや教育課程の再編を行い、コロナ禍でも児童の学習機会を減らさないよう取り組んだ。 ○特に算数科において、少人数指導や複数指導を取り入れ、学力向上に取り組んでいる。また、「ガッテンプリント」に楽しく取り組む仕組みを作ったことで、子どもたちが進んで学習に取り組むようになった。 ○2・3年生の学習定着を測るためのプリントを作成し、学年の振り返りと補習に活用した。 ▲ICT機器を活用した、教科指導や個別の学習支援、豊かな人間関係を築く取り組みを一層行う必要がある。	B	・坂本小では長年にわたり、基礎学力の定着を図る教育の推進、人権教育の推進、地域と共にある学校の推進に取り組んできた。時代と共に方法や手立は大きく変化するが、次年度もこのことをベースにして課題に取り組んでもらいたい。 ・児童も教師も保護者も地域も大きな価値転換を迫られた一年だった。教員は決してあきらめることなく、新しい学校での生活様式を構築しようとした姿が伝わった。 ・社会の急激な変化に柔軟に対応する力、判断力をつけるためには、生活力、知恵が必要になる。 ・コロナ禍で大変ではあるが、ある意味チャンスだと思う。伝統を大切にしつつも、時勢により変化することは大切である。	・GIGAスクール構想の取組としてタブレット等の情報端末を活用し、子どもが自分の考えをもったり、議論等を通してその考えを広げたり深めたりする授業を推進する。また、コロナ禍の制限された学校行動様式の中で、ICT機器を使って子どもたちの人間関係や自己有用感を育む実践に取り組む。 ・蔵書を充実させることにより、読むことに慣れ、読むことに関心をもたせることで読書活動を推進する。 ・コロナ禍により教育効果に照らして業務の見直しを行うなど、教職員の意識改革をさらに図る働き方改革を推進する。	
	11	教職員の指導力及び組織的な教育力の向上	B					
	12	働き方改革の取組と教育活動の質の改善	B					
育ちと学びを支える連携	① 家庭・地域との連携	13	保護者の子育てに対する積極的な支援	B	○保護者や地域との研修や交流はできていないが、メールやホームページ、各種通信等で情報発信は丁寧に行うように心がけた。 ○心身の小さな変化に気づけるよう子どもたちの様子を観察し声をかけ、早い段階で過程との連携に努めている。 ○感染予防対策を十分に行った上で、学年をわけて学期ごとに避難訓練ができています。 ○教室での学習参観は感染防止のため実施できなかったが、ZOOMを活用した学習公開を行うことができた。 ▲感染防止のため、地域との交流や地域人材の活用が難しかった。	B	・本年度は様々な行事が中止になったが、次年度は一つ一つの行事の内容を(例年より少ないながらも)充実したものにしてもらいたい。 ・コロナ禍で行事が中止せざるを得ない中、柔軟な対応や発想で、学年ごとの運動会やZoomによる学習公開などの新しい生活様式に基づいた運営は来年度も必要。 ・Zoomでの授業公開に期待している。 ・学校図書数が足りない件は、ぜひ地域に問題を投げかけてはどうか。 ・古くからのよき伝統のある地域と新しく開拓されている地域双方の良きところの融合に期待する。	
		14	保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会、研修会の実施、地域人材の活用	B				
		15	防災教育の推進と安心・安全な学校づくり	B				
	② 保幼小中の連携	16	子どもの校種間交流や教員の出前授業	B	○直接交流する代わりに、手紙やDVDによるやりとりをするなど、可能な方法を探りながら交流を進めた。	B	・地域の者として何となく学校の役に立ちたいと考えているが、学校から応援要請等の発信があるとよい。コミュニティースクールのメンバーに依頼するなどしてもらえれば、人を集めて協力することができる。 ・保幼小で十分に連携をとって、中学校まで一貫した支援体制を整える必要がある。	
		17	校種間の授業公開や合同研修会	B				
		18	保幼小の接続期の教育課程の編成等校種間のカリキュラム研究	B				
組織的体制の充実	① 生徒指導体制の充実	19	いじめや暴力行為、不登校等生徒指導上の諸課題の早期発見、日常的な予防指導 ※	A	○生徒指導担当が校内を巡回しながら気になる児童に声をかけたり、担任と相談して連携を図りながら早期対応にあたることができた。 ○一つの事案に対して学年や生徒指導など複数の教員で対応している。 ○教育相談の校内体制が整っており、急を要するケースにも対応できている。 ▲コロナの影響で関係機関の業務が停止した場合に、情報共有がうまくいかないことがあった。そのような場合でも、児童の生活に影響が出ないよう、新しい連携の仕方を構築していく必要がある。	A	・やはり小学生は学校へ行って対面で授業を受け、仲間と一緒に集団生活を送ることで成長する。 ・5つの心得「挨拶」「はきもの」「そうじ」「時間」「人」等、今まで積み上げてきたことを徹底するとともに、どの子も安心して学校生活を送れるような温かい生徒指導・教育相談の組織的体制の継続に努める。 ・新型コロナウイルス感染症に関して、発症者や濃厚接触者等への偏見や差別につながらないよう発達段階に応じた指導に努める。	
		20	生徒指導・教育相談体制の確立と組織的な推進 ※	A				
		21	家庭・地域・関係機関との連携による指導	B				
	② 特別支援教育の充実	22	個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用	A	○子ども発達相談センターや特別支援教育室(巡回相談)等の関係機関と連携し、児童の発達課題を把握することにより、学級づくりや個別支援に生かしてきた。 ○特別支援コーディネーターを中心とした組織的な取組を進め、就学指導を充実させることができた。 ▲コロナ禍で園との就学指導の連携が停滞した時期があった。	B	幼い頃から個別の教育支援等を受けられるとよい。 ・授業のユニバーサルデザイン化を進めることで、どの子にも分かりやすく取り組みやすい環境を整え、よりきめ細かな指導ができるよう努める。 ・特別支援教育コーディネーターが中心となって学級担任と連携を図り、個に応じた指導を充実させる。	
		23	組織的・計画的な特別支援教育体制の確立	B				
		24	関係機関と連携した相談体制の充実	B				
学校満足度	25	児童生徒の学校満足度	B	B	児童アンケートでは満足度が僅かながら昨年度より伸びており、児童は概ね満足している様子がうかがえる。	B	・修学旅行を従来と違った新しいやり方で実施することで、子どもたちが十分満足できたことは大きな成果であった。 ・児童、保護者、地域にとって、よりよい学校づくりに努める。	

* 各校の学校評価書から上記の1～25の観点にかかる自己評価および学校関係者評価を取り出し、本表にご記入ください。
* 評価の項目と関連があると考えられるSDGsの目標を参考として表示しています。